

## 生成変形文法への手引

小林 泰 秀

生成文法理論は、1957年に Chomsky が Syntactic Structures を出版してから、もう20年近くになろうとしている。その後、言語理論に修正が加えられ、Chomsky が1965年に出版した Aspects of the Theory of Syntax によって総括的に示された理論を「標準理論」と呼ぶと、その後 Chomsky 自身によって修正された「拡大標準理論」、Fillmore を中心とした「格文法」、McCawley, Postal, Lakoff, Ross らの「生成意味論」と、いろいろ理論的研究がなされている。これら大別した4理論を通じて共通する点は、いずれも文法記述に変形規則が必要であり、意味に於いて生成的であり、言語の普遍性追求にある。本稿は、入門講座の為に書かれたものである為、諸理論をくわしく述べることはせず、標準理論を中心に、生成変形文法について述べよう。

### 1. Chomsky 以前のアメリカ構造言語学

まず、なぜ Chomsky の生成文法が注目されるに至ったかを、彼以前のアメリカの構造言語学と比較しながら述べる。

アメリカ構造言語学は、人類学と密接に関係をもった社会科学の一部門として発足し、未知のアメリカ・インディアン語の分析や記述を母体として生まれ、育った学問で、現地作業的な方法論から始まり、帰納的に理論や説明を引き出して、体系づけられたものである。Bloomfield の立場は、純粹に客観的、即物的で、言語学の対象を直観的な観察を許すもののみに限定しようとした。この立場は、機械主義と呼ばれるもので、心理主義や意味を基準にする方法論を排除する。

Bloomfield の理論を汲む新ブルームフィールド学派は、レベルの分離を強調し、音声に関する段階を分析して、音素の体系を記述し、それから形態素の段階に進み、そののち統語論を論じ、最後に意味である。このように音から始まって文へ、という順で進んだアメリカ構造言語学は、音素論に於いてその業績が著しく、統語論や意味論に於いては少ない。この言語理論は主観を排除するため、だれが調査しても同じ結論をみるという純粹に科学的なものである。

これに対して Chomsky の理論は、以前のような分類学的方法主義の資料中心主義、帰納主義、機械主義、形式主義に対して、それぞれ論理主義、演繹主義、精神主義、内容主義というように、原則的に対立している。つまり、意味から始まって音声へという順に進められるのである。Chomsky は物理的、即物的な見方ではなく、言語理解の背後にある生得的な能力を問題にしたのである。

構造言語学の最も進んだテクニックとされる IC 分析では、次の2文の構造の相異は明らかにされない。

(1) John is easy to please. (ジョンを喜ばすのは容易だ)

(2) John is eager to please. (ジョンは喜ばせたがっている)

構造言語学では、外形の観察だけをしたため、内容の洞察が出来なかったのである。それに対して Chomsky は、表面の形式は内面の構造に深く根を持っていると考えた。表面の現象を正しく理解し、分析、記述するためには、その深いレベルを考えなければならない。言語の音声的表面形式の奥深くひそむ、より深いレベルを洞察して初めて、上の(1)と(2)の文は分析、記述出来るのである。

## 2 言語能力

我々はみな、母国語の音声と意味を結びつける能力を持っている。ある者の発話文があいまいであればそれに対し、2種以上の意味解釈が出来、又、違った発話文であっても1種の意味解釈しか出来ないことが分る言語能力をそなえている。例えば、次の文(3)は、2通りの解釈が出来、(4)と(5)は意味が同じである。

(3) This pig is ready to eat. (「豚が何かを食べようとしている」という意味と「豚を食べる用意が出来た」の意味)

(4) It seems that he is a linguist.

(5) He seems to be a linguist.

日本語を母国語とする者は、(6)が2通りに解釈され、(7)と(8)は同義語であることが分る。

(6) 太郎は花子を大声で歌わせた。(「太郎の歌わせ方が大声である」の意と「花子が大声で歌った」の意がある)

(7) 太郎は花子が無罪だと信じている。

(8) 太郎は花子を無罪だと信じている。

我々は言語音と意味を結びつける規則を無意識的に知識として身につけている。そして、この規則を明示的に記述することが、言語の文法解明である。我々は、又、今まで聞いたことのない、新しい単語の結合による文を聞いて、その意味が分るし、又、自ら用いることも出来る。我々はこのような創造力を備えているのである。

## 3 言語の普遍性

Chomsky (1965) や Katz and Postal (1964) らは、人間の言語に共通にみられる性質、つまり、自然言語の文法に備わっているべき性質を言語の普遍性と呼び、生成変形文法の重要な考究目標としている。言語の普遍性は、子供が言語を習得する際に、基盤として用いられるものの中に含まれるものであり、その解明は子供の言語習得能力の解明となる。更に、言語の普遍性は、音声上の、統語上の、意味上の普遍性を、形式的な言語的普遍性(表層構造から音声表示を得る音韻規則、変形規則、投射規則、周期規則など)と実質的な言語的普遍性(弁別的素性、名詞、動詞あるいは名詞句、修飾語、疑問を表わす要素、意味標識(男性、女性)など)に区別している。

このように、この理論は、世界中の言語の根底になっている規則性を反映するために、どんな制限を文法に課すべきかを問題にする。つまり、言語記述に妥当な単位はどれか、どんな規則が必要か、という仮説を提出する。例えば、深層構造と表層構造という区別は普遍的であり、句構造規則は各言語によってそ

それぞれ異なった性質を持っているが、すべての自然言語を記述する上に必要である。最近の傾向として、一般言語学の書物に日本語の例が引かれているのは、言語の普遍性の追求と共に、個別言語の占める位置を究明しようとする為である。普通言語理論で一般的な形式上の枠組や規則の性質、用いられる範疇が定められていると、今度は個別言語の特殊性に関心を向け、各言語に特殊な規則性を究明するのである。つまり、一般言語理論の研究は、言語の内面にひそむ普遍性を洞察し、それに基づいて個別言語の特殊性を理解することにある。普遍性は、抽象的なレベルでの一般性を問題にしており、その普遍性に関する洞察を得なければならない。

#### 4. 標準理論

標準理論は当初からこういう名で呼ばれていたものではなく、他の理論と区別する為、Chomsky の *Aspects of the Theory of Syntax* (1965) に示された理論を呼ぶものである。この理論で示された仮説を、その前の初期理論 (Chomsky (1957, 1962), Lees (1960) で代表される) と比べて述べよう。

初期理論に於いては、文法は始発記号である S と 3 種の規則 (句構造規則、変形規則、形態音素規則) から構成され、それぞれの規則を通じて文を生成すると考えられた。句構造規則とは、成分構造規則とも呼ばれ、書き換え規則の一種である。例えば、 $X \rightarrow Y / Z - W$  という形式をもつ規則があると、「X を Z と W の間という環境において、Y に書き換えよ」という指示を表わし、「X は単一の要素でなければならない」という制限条項がある。句構造規則で書き換えを行い、(9) という終端記号列が派生されたでしょう。

$S \rightarrow NP + VP$

$VP \rightarrow Aux + VP$

⋮

(9) the + boy + present + like + the + girl

(9) に変形規則で否定変形規則を随意的に適用して (10) が得られる。

(10) the + boy + present + n't + like + the + girl

更に (10) に present の前に do を補う変形規則が義務的に適用され、(11) となる。

(11) the + boy + do + present + n't + like + the + girl

ここで随意的というのは、変形が適用されなくてももとの構造が正しい文として表わされるものである。上の例で、否定規則が適用されなくても、肯定文として正しい文が生成されるのである。この考え方は後で述べるが修正される。一方、義務的というのは、変形規則が適用されなければ、文法的な文が生じない場合である。上の例の do 挿入がそれであり、その他 Chomsky (1957) は、助動詞変形、語境界の変形を挙げている。

随意的変形の中には、意味を変えないものと、意味を変えるものがあり、前者の例として、疑問文、否定文、命令文を導く諸変形がある。上の (11) は最後に形態音素規則により、音素の連続に変えられる。

(12) do + present + n't  $\rightarrow$  / dʌznt /

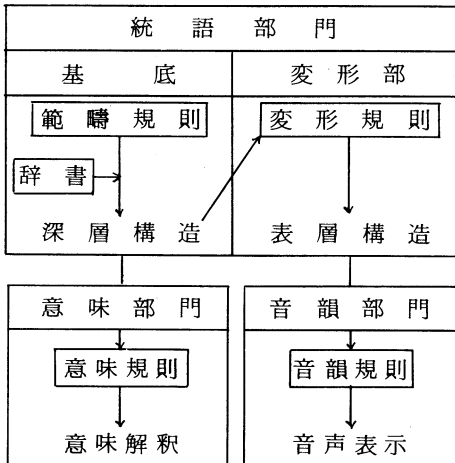
(12) も書き換え規則であるが、上記で述べた「X は単一記号でなければならない」という制限は、形態音素

規則にはない。

以上の初期理論は、標準理論では、句構造規則で生成された抽象的な深層構造と、これから変形によって派生される表層構造とに区別している。Chomsky (1965) は、深層構造は範疇部門および語彙目録から成る基底部門によって生成され、一方においては意味部門によって解釈され、他方に於いては変形規則によって表層構造に写像され、表層構造は音韻部門によって解釈されるとしている。

このように文法の統語部門は、それぞれの文についてその文の意味解釈を決定する深層構造、および、その文の音声解釈を決定する表層構造を指定しなければならない。以上の文法の構成は次のようになる。

(13)



範疇規則は初期理論の句構造規則に対応するものであるが、かなり異なる。初期理論の「 $X \rightarrow Y$ のYにはXが含まれてはならない」という制限は、不要、あるいは不当なものとして除かれている。それは、 $S \rightarrow \text{and } S^n$ ,  $NP \rightarrow \text{and } NP^n$  とか、 $NP \rightarrow NP + S$  (関係詞節) などの規則が必要であるためである。

等位構造、関係節構造、補文構造は、初期理論では一般変形(他の文を埋め込むのに任意に抽象記号COMP(LEMENT)やREL(ATIVE)を選択し、この位置に文を埋め込む)で扱われていたが、標準理論では等位接続された文や、他の文を埋め込んだ深層構造を生成している。例えば

(14) I believe him to be innocent.

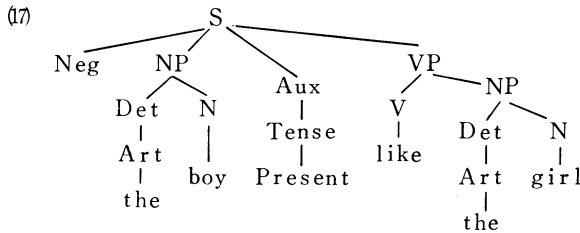
の補文構造の文では、be innocent の意味上の主語は he であり、he is innocent という文が深層構造に埋め込まれている。日本語でも同じで、前に例を挙げた(7)と(8)は同義であって、同一の深層構造を生成し、(7)に補文主語の目的語化規則が適用されたものである。

更にこの範疇規則の修正された一例を挙げると

(15)  $S \rightarrow (\{ \overset{Q}{\text{Imp}} \}) (\text{Neg}) \frown NP \frown Aux \frown VP$

であり、初期理論の「意味を変える変形」が「変形は意味を変えない」という仮説になっている。つまり意味を決定するのは深層構造で、変形を決定するのは表層構造である。(15)の文型のものは初めから疑問文、命令文、あるいは否定文として生成されるものであり、これらの意味素性を持つ文は義務的に変形規則が適用される。一例として(16)の深層構造は枝分れ図で(17)のようになる。

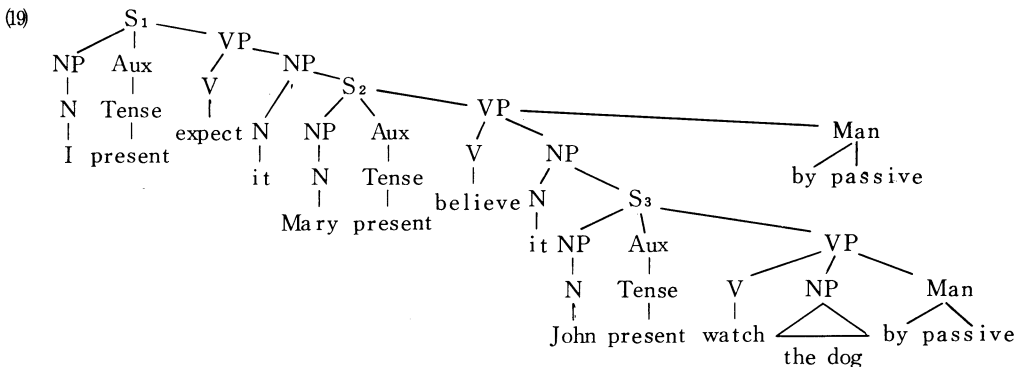
(16) The boy doesn't like the girl.



(17)に見られるように、意味素性 Neg が S に付加されており、(17)の深層構造には義務的に否定変形規則が適用されなければならない。

次に標準理論の重要な仮説として、変形周期の原則がある。初期理論で変形規則は、線形順序をなすと言われていたが、それが部分的順序をなすという考えに改められた。つまり、変形規則の中には、最も深くはめこまれた文に一定の順序でかかり、それが終わってから順次にすぐ上の文に同じ順序で適用する規則があるという仮説である。(18)の深層構造は(19)である。

(18) I expect the dog to be believed by Mary to be watched by John.



by passive は Chomsky (1965) では Man(ner) の一種であり、Man があることはその文が受動文であることを示す。Man に対する考え方には問題があり、詳しくは G. Lakoff (1970), Hasegawa, (1968), R. Lakoff (1971) などを参照のこと。

(19)に必要な周期規則は、(a)補文化要素配置、(b)‘it’置換、(c)受動、(d)補文化要素消去、(e)接辞規則であり、まず S<sub>3</sub> には、内部に埋め込まれた文がない為、(a)(b)(d)の規則が第 1 周期で適用されず、(c)と(e)の規則を S<sub>3</sub> に適用すると、S<sub>3</sub> は

(20) the dog be-present watch-en by John

となり、S<sub>2</sub> に上に述べた(a)から(e)までの規則全部が適用出来るから、それらを適用すると、S<sub>2</sub> は

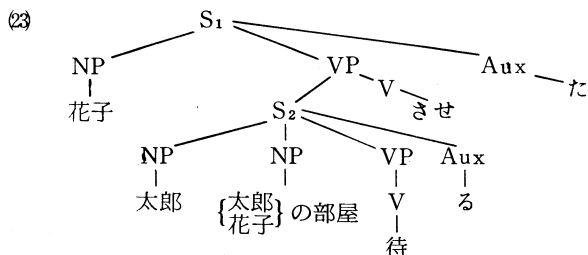
(21) the dog be-present believe-en by Mary to be watch-en by John

となる。S<sub>3</sub> の the dog を S<sub>2</sub> の it に置き換える場合、S<sub>3</sub> の残りの部分を S<sub>2</sub> の VP の最後部へもって行くため、by Mary が believe-en の次に来る。最後の周期として、S<sub>1</sub> に受動規制を除いた 4 つの規則が適用出来、それらを適用して(18)の文が得られる。

次に日本文を使って変形周期の原則を証明してみよう。(22)の深層構造は(23)であり、「自分」は「花子」

と「太郎」の2人が考えられる。以下の派生方法は標準理論に従うものではない。これに関する論文は、Kuno (1973) が詳しく、更に Aissen (1974) と Shibatani (1973) を見ると良い。

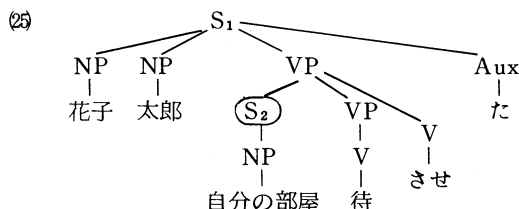
(23) 花子は太郎を自分の部屋で待たせた。



深層構造が「太郎の部屋」として、まず第1周期としてS<sub>2</sub>に再帰代名詞化規則を適用し、S<sub>2</sub>は

(24) 太郎が自分の部屋で待(mat)る

となる。次に第2周期として、S<sub>1</sub>の補文S<sub>2</sub>の時制を消去(補文時制消去)し、動詞をS<sub>1</sub>のVPに繰り上げ(動詞繰り上げ)、主語をS<sub>1</sub>に繰り上げ(補文主語繰り上げ)ると、(25)のようになる。



(25)のS<sub>2</sub>は、もはや文としての機能を失ったので、S<sub>2</sub>の記号を消去する。助詞は変形規則で付加され、深層構造にはない。以上の変形規則を周期的に適用することにより、(23)が得られる。もう一つ、(23)には「自分」が「花子」の意味があるが、これは再帰代名詞化を第2周期S<sub>1</sub>で適用することによって派生される。

標準理論の初期理論と比べての修正を以上のように主なものとして、3つ(1, 等位接続文や他の文を埋め込んだ深層構造を生成する。2, 変形は意味を変えない。3, 変形周期の原則が存在する)を述べた。

## 5. 標準理論後の諸理論

標準理論後に現れた理論の主なものとして、格文法、生成意味論、拡大標準理論が挙げられる。紙面の関係でこれらの理論を詳しくここで述べることは出来ないが、各理論の主な特徴を述べよう。

### 5.1 格文法

格文法はFillmoreのThe Case for Case (1968)によって総括的に示された理論であり、彼は格という概念があらゆる言語の文法の基底構造において位置を与えられ、かつ格関係が理論の根元辞項であるように、深層構造が構想されると述べている。主語や目的語などは深層構造に位置すべきではなく、表層構造のものと解している。つまり、主語や目的語という関係を、深層構造のものとはみないで、表層構造のものとみるのである。更に、動詞句という範疇を除外している。格文法の構造は次のようになる。

(26)  $S \rightarrow M(odality) + P(roposition)$

(27)  $P \rightarrow V + C(ase)_1 + \dots\dots\dots C_n$

格範疇には動作主格 (Agentive), 与格 (Instrumental), 作為格, または結果格 (Factive), 位置格 (Locative), 目的格 (Objective) 等がある。次の(28)~(32)の文を見てみよう。

(28) The door opened

(29) John opened the door

(30) The door was opened by John

(31) The key opened the door

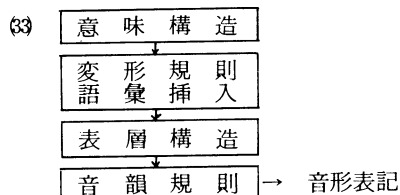
(32) John opened the door with the key

以上の文で、動詞 (open) に対する各名詞 (句) の関係は同一である。しかし、表層構造におけるそれらの機能関係は、the door が(28)と(30)では主語であるが、(28), (31), (32)では目的語であり、John は(29)と(32)では主語であるが、(30)では前置詞句であるように同一ではない。このように格文法では、基底構造においては動詞が中心となり、それに格を表わす 1 個以上の名詞句が結びついていると考える。主語、目的語等の関係は、表層構造に於ける関係にすぎないのである。格文法に関しては、Fillmore の上記の書物の他に、彼の (1966, 1970) と Chomsky (1970), Dougherty (1970) を合せて参照のこと。

## 5.2 生成意味論

生成意味論の考え方は、深層構造より更に抽象的な意味構造が、文の基底構造とされなければならないというものである。格文法で Fillmore が VP という範疇を除外し、V としたように、生成意味論の特徴は範疇の減少である。例えば Lakoff (1970) は、動詞と形容詞を同一の範疇 V にまとめ〔± Verb〕にし、Ross (1969) は助動詞を V にし、Postal (1966) は Art を N に含み、その他、これまで独立の範疇とされてきた前置詞、Neg, 等位接続詞、Tense, 数量詞などが V として扱われるようになった。更に、命令文、疑問文も執行分析によって姿を消した。執行分析とは Austin (1962) が執行文を指摘したのにはじまる。Austin は I order you to go と Go! はともに執行文 (主語が 1 人称で間接目的語に 2 人称を持つ) であるが、この 2 つの違いは、執行動詞 order が現われているかどうかにあると述べている。これが更に Katz and Postal (1964) に於いて、命令文 Go home は、I request you that you go home の意味を、疑問文 Is it true? は、I request you to tell me whether or not it is true の意味をもつと指摘されている。後に Ross (1970) に於いてはすべての平叙文が基底においては執行文であるとし、John loves Mary は I declare to you that John loves Mary の構造をもつとしている。このように現在では範疇として、S. NP. Pred (又は V) の 3 種類だけが認められている。

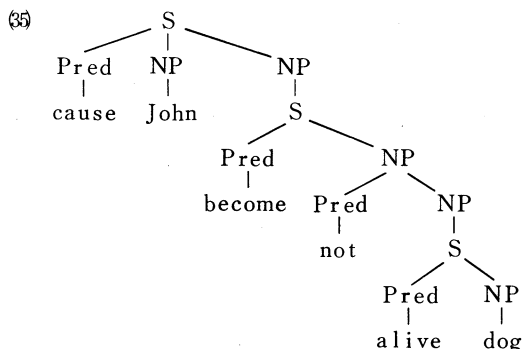
生成意味論の文法の構成は次のようになる。



生成意味論では、単語を更に抽象的な意味構造に分解したものを基底と考えている。そして変形によって派生された意味構造が、それに対応する単語によって置きかえられる。文の意味がすべて意味構造に定まっている為、深層構造はいらない。一例を挙げると、

㉔ John killed the dog

という文は、㉓の構造から成る。以下については McCawley (1968 b, 1970 a), その他、彼のいくつかの論文に見られる。



㉓により深く埋め込まれた文の順に述語繰り上げ規則が適用され、cause-become-not-alive となり、この Pred に対して語彙項目 kill が挿入されると㉔の文が派生される。この語彙項目のやり方は、述語繰り上げを最も上の S まで適用しないで、途中の周期で別の語彙項目を挿入して次の㉕と㉖の文が得られる。

㉕ John caused the dog to cease to be alive. (become-not → cease)

㉖ John caused the dog to die. (become-not-alive → die)

このように生成意味論の意味表示に於いては、語彙項目は存在せず、NP に支配される変項表示と Pred に支配される抽象的な意味要素が存在するのみであり、語彙項目の挿入は後の段階で行われる。生成意味論の意味表示は、標準理論のそれと異なり、枝分れ図によって、すなわち統語構造を表わす方法と同じ方法によって表わすことが出来る。生成意味論は意味論と統語論の境界線を否定している。書物に Lakoff (1971), McCawley (1970 b) があるので参照されたい。

### 5.3 拡大標準理論

標準理論で「変形は意味を変えない」と述べた。これに対して「意味を変える変形」を認め、変形の結果派生された表層構造によっても意味解釈が与えられたとするのが、拡大標準理論である。文の意味解釈に必要な文法関係は標準理論と同じく、深層構造によって決定されるが、数量詞や否定辞のような論理語の作用域、文の焦点とある種の前提などは、表層構造を考慮に入れる意味規則によって決定される。これは Chomsky (1970, 1972) がこのように修正を加えた理論である。

文の焦点と前提の問題になる例を挙げよう。

㉗ Did you send John the BOOK ?

㉘ Did you send the book to JOHN ?

正常に話された場合、BOOK, JOHN が強く発音される。㉗と㉘は同一の深層構造をもつと考えら

れるが、両者の前提が異なる。㉔の前提は「ジョンに何を送ったか」であり、㉕のそれは「本を誰に送ったか」である。故に㉔と㉕の焦点も異なり、㉔に対する答は「いや、本ではなく別のものを送った」、㉕に対する答は「いや、ジョンにではなく別の人に送った」が成り立つが、逆はだめである。このように文の焦点や前提を文の意味の一部と考えるなら、これらは表層構造上の現象であるから、文の意味解釈は深層構造のほか表層構造によっても決定されることになる。標準理論の「意味部門の入力は深層構造のみである」のに対し、「深層構造のみによっては決定されない意味情報」を指摘している書物は、Chomsky の1970年の書物以前に、Kuroda (1969), Jackendoff (1969) らのがある。

大ざっぱに各理論を述べてきたが拡大標準理論と生成意味論の間で、特に意味と文法の相互関係という点でなお激しい論戦が続けられている。それはむしろ同じ方法論に立脚した守備範囲の設定のしかたの違いかも知れない。しかし生成変形文法の諸理論が共通してもつ重要な点は、文法を厳密に定義するという点である。言語理論の目標が自然言語に対する正しい文法理解の設定であるなら、文法の記述形式や適用のやり方に厳しい制限を付けることを試みなければならない。このように文法にさまざまな条件を課すことにより、その条件を満たすもののみが文法として許容され、他は除外される。そのような条件の総体が普遍文法である。

## 参 考 文 献

- Aissen, Judith. 1974. "Verb Raising," Linguistic Inquiry, Vol. 1, No. 3.
- Austin, J. L. 1962. How to Do Things with World, Oxford University Press.
- Chomsky, Noam. 1957. Syntactic Structures, The Hague: Mouton.
- \_\_\_\_\_ 1962. "A Transformational Approach to Syntax," Proceedings of the 1959 Conference on Problems of Linguistic Analysis in English (ed. by A. A. Hill), The University of Texas, pp. 124-158. Reprinted in The Structure of Language (ed. by Jerry A. Fordor and Jerrold J. Katz), Prentice-Hall, 1964.
- \_\_\_\_\_ 1964. Current Issues in Linguistic Theory, The Hague: Mouton.
- \_\_\_\_\_ 1965. Aspects of the Theory of Syntax, M. I. T. Press.
- \_\_\_\_\_ 1970. "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," Studies in General and Oriental Linguistics: Presented to Shiro Hattori on the Occasion of His Sixteenth Birthday (ed. by Roman Jakobson and Shigeo Kawamoto), TEC. Co., pp. 52-91.
- \_\_\_\_\_ 1972. "Empirical Issues in the Theory of Transformational Grammar," Goals of Linguistic Theory (ed. by S.

- Peters), Englewood Cliffs, N. J. : Prentice Hall.
- Dougherty, Ray C. 1970. "Review Article: Recent Studies on Language Universals," Foundations of Language, Vol. 6, pp. 505-561.
- Fillmore, Charles J. 1966. "Toward a Modern Theory of Case," The Ohio State University Project on Linguistic Analysis, Report No. 13, pp. 1-24.
- \_\_\_\_\_ 1968. "The Case for Case," Universals in Linguistic Theory (ed. by Emmon W. Bach and Robert T. Harms), New York: Holt, Rinehart and Winston, pp. 1-88.
- \_\_\_\_\_ 1970. "The Grammar of Hitting and Breaking," Readings in English Transformational Grammar (ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum), Waltham, Mass. Blaisdell, pp. 120-133.
- Hasegawa, Kinsuke. 1968. "The Passive Construction in English," Language, Vol. 44, No. 2, pp. 230-243.
- Jackendoff, Ray S. 1969. "An Interpretive Theory of Negation," Foundations of Language, Vol. 5, No. 2, pp. 422-442.
- Katz, Jerrold J. and Jerry A. Fodor. 1963. "The Structure of a Semantic Theory," Language, Vol. 39, pp. 170-210.  
Reprinted in Fodor and Katz, 1964.
- \_\_\_\_\_ and Paul M. Postal. 1964. An Integrated Theory of Linguistic Descriptions, M. I. T. Press.
- Kuno, Susumu. 1973. The Structure of Japanese Language, M. I. T. Press.
- Kuroda, S. -Y. 1969. "Attachment Transformations," Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar (ed. by David A. Reibel and Sanford A. Schane), Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, pp. 331-351.
- Lakoff, George. 1970. Irregularity in Syntax, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- \_\_\_\_\_ 1971. "On Generative Semantics," Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, Anthropology and Psychology (ed. by Danny Steinberg and Leon Jakobovits), London: Cambridge University Press, pp. 232-296.
- Lakoff, Robin. 1971. "Passive Resistance," Papers from the Seventh Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Chicago: Department of Linguistics.
- Lees, Robert B. 1960. "The Grammar of English Nominalizations," IJAL, Vol. 26. No. 3.

- MaCawley, James D. 1968a. "The Role of Semantics in a Grammar," Universals in Linguistic Theory (ed. by Emmon W. Bach and Robert T. Harms), New York: Holt, Rinehart and Winston, pp. 124-169.
- \_\_\_\_\_ 1968b. "Lexical Insertion in a Transformational Grammar without Deep Structure," Papers from the Fourth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, pp. 71-80.
- \_\_\_\_\_ 1970a. "English as a VSO Language," Language, Vol. 46, pp. 286-299.
- \_\_\_\_\_ 1970b. "Where Do Noun Phrases Come From?" Readings in English Transformational Grammar (ed. by Jacobs and Rosenbaum).
- Postal, Paul M. 1966. "On So-Called Pronouns in English," Monograph Series on Languages and Linguistics 19, pp. 177-206. Reprinted in Jacobs and Rosenbaum, 1970.
- \_\_\_\_\_ 1970. "On the Surface Verb 'Remind'," Linguistic Inquiry, Vol. 1, No. 1, pp. 37-120.
- \_\_\_\_\_ 1972. "The Best Theory," Goals of Linguistic Theory (ed. by Peters), pp. 131-170.
- Ross, John Robert. 1970. "On Declarative Sentences," Readings in English Transformational Grammar (ed. by Jacobs and Rosenbaum).
- Shibatani, Masayoshi. 1973. "Semantics of Japanese Causativization," Foundations of Language, Vol. 9.